



この世でもっとも賢明な人と神が呼ばれたソロモン王は、こう言いました。

伝道者の書4:9 ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。

4:10 どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。

4:11 また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなるう。

4:12 もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

仲間は大切だと神は言われます。私たちがひとりぼっちでいることも望まれません。

ヘブル10:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

10:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。

使徒パウロも、交わりや仲間の重要性を理解していました。

私たちがともに見てきたコロサイ人への手紙の今までの学びでも、

パウロは人間関係について多くを語っています。また、クリスチャンとしての人との関わり方がどのようなかを語っています。

人生におけるすべての関係性で、私たちは愛と知恵をもって歩むべきです。

家族や友人に対して、上司や従業員に対して、隣人、見知らぬ人、敵に対して、相手がクリスチャンか未信者かにかかわらずです。神にはえこひいきがないからです。

それは神が

2ペテロ3:9b ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

ですから、神はご自身の栄光の輝きを滅びゆく暗闇の世界に輝かせるよう、私たちに召しておられます。そして、私たちは人との関わりでそれを実行できるのです。

今日見る4章の後半では、パウロは自分の働きに大きく貢献してくれた神のしもべたちのことを語っています。

彼らは、信仰のためにローマで牢に入っているパウロを慰め励ましました。彼らはパウロにとって大きな祝福でした。

コロサイ4:7 私の様子については、主にあって**愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労の**しもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。

4:8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。

4:9 また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせしてくれるでしょう。

ここでパウロはテキコとオネシモについて

忠実な、愛する兄弟と呼んでいます。

皆さんの周りに忠実な人はいるでしょうか。

忠実な友人や同労者、家族が周りにはすばらしいことです。

反対に、私たちの周りの人が忠実でなかったら、とても悲しいことです。深く傷つけられることもあります。とくに親しい人が忠実でない場合はそうです。

そのようなことが起こると、心を閉ざして、人を信じなくなり、恨みを募らせるのは簡単ですが、このように傷つくことを神が許されるには理由があると思います。

それは、私たちに人を恨んでほしいからではありません。

むしろ、私たちに立ち直って成長してほしいからです。

そして、傷を癒されて立ち直り、成長する最善の方法は、神に頼ることです。

2コリント1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。

1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。

誰かの不誠実によって傷ついたことがありますか。もしそうなら、私たちは誠実の限りを尽くしましょう。

というのも、傷つけられた気持ちがわかるからです。

私たちの人生に試練が起こるとき、神は私たちに慰めたいと願ってくださいます。それは、私たちが他の人たちをいつか慰めることができるようにです。

世間には傷ついた人があふれています。そして、そのような人を助けるのに一番適しているのは、同じような経験、またはもっと辛い経験をして共感できる人でしょう。

ここに登場するパウロの友人は、忠実だただけでなく、信仰の深い人たちだったとも思います。

神への信仰に満ちていることは、人生で直面するあらゆる試練を乗り越えるカギとなります。

私たちが信仰に満ちているなら、忠実でいつづけることもできるでしょう

パウロによると、テキコとオネシモは、忠実だただけでなく、**愛する兄弟たち**でもありました。

もちろんこの二人はパウロの血のつながった兄弟ではありません。信仰の兄弟です。

「愛する」というのは、親愛の表現です。

原語のギリシャ語では、

27 agapetov agapetos {ag-ap-ay-tos}
アガペトス

アガペの派生語であることがわかります。

ローマ5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

これは、互いに愛し合いなさいとイエスが言われた時に使われたのと同じ単語です。

ヨハネ15:12 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも**互いに愛し合う**こと、これがわたしの戒めです。

また、神ご自身について書かれた箇所でも同じ単語が使われています。

1ヨハネ4:16 私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。**神は愛**です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

ですから、コロサイ4:7でパウロがテキコとオネシモについて書いた**愛する**という単語には、意味が込められています。

コロサイ4:7 私の様子については、主にあって**愛する**兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。

27 agapetov agapetos {ag-ap-ay-tos}
アガペトス

愛する、親愛なる、

愛する、敬愛する、大好きな、**愛すべき**

この最後の定義をご覧ください。

愛すべき

クリスチャンである私たちは、神が私たちを愛し赦してくださったように、無条件に人を愛し赦すように召されています。

ここで自問すべきことは、

私たちは愛すべき存在かということです。

あの人は愛すべき存在ではない、と人のことを言うのは簡単です。

人の欠点を探すのは簡単だからです。

けれども、人に向かって指差すと、3本の指がこちらを向いていることを忘れないでください。

ですから、人のことはともかく、

問うべきは、私たち自身が愛されるべきふるまいを人前でしているかということです。

先週申し上げたように、「因果応報」です。

これは、悪いことだけに限りません。

愛をふりまけば、愛が返ってくるでしょう。

箴言 18:24a 滅びに至らせる友人たちもあれば、兄弟よりも親密な者もいる。

先ほどの問いに戻りますが、私たちは愛されるべき存在でしょうか。

このように自分に問うてみる必要があります。

私のような人を、私は愛せるだろうか。

私のような人と、私はいっしょにいたいと思うだろうか。

自分が人に望むような方法で、私は人に愛を示しているだろうか。

先週学んだように、これは最高の律法と呼ばれています。

James 2:8* If you really fulfill *the royal law* according to the Scripture, “You shall love your neighbor as yourself,” you do well;

ヤコブ2:8 もし、ほんとうにあなたがたが、聖書に従って、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という**最高の律法**を守るなら、あなたがたの行いはりっぱです。

Remember... to fail to do so would result in Royal consequences.

そうしなければ、それなりの結果がついてまわります。

パウロはこう言っています。

ガラテヤ6:7 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その**刈り取り**もすることになります。

因果応報なのです。

私たちは愛の種を蒔いているでしょうか。

私たちは生き方をおして愛を示しているでしょうか。

そうしていないなら、人から多くの愛を期待することはできないでしょう。

少し自己吟味をしてみましょう。

パウロは、霊に満たされた信徒の生き方に現わされる愛がどのようなものかいくつか挙げています。

ガラテヤ5:22 しかし、**御霊の実**は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

5:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。

ガラテヤ5：22で、パウロは、**御霊の実**は愛（アガペ）だと言っています。

世間の人々が私たちの生き方を見て、無条件で自己犠牲的な神の愛を見ることができるようでしょうか。

神が与えてくださる喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制を、つらい状況でも示せているでしょうか。

それは無理な話だと思うかもしれませんが、

御霊によって歩むなら、この美しい実は誰の目にも明らかに見えるようになります。

人を変える神の愛が、私たちの日常生活で実践されることを、神は望んでおられます。

私たちが神の御霊に自分自身を明け渡し、神のみことばが私たちの心にとどまることを、神は願っておられます。

私たちの人生に神の愛が生まれ、完成されていき、私たちが神の弟子であることに疑いの余地がなくなることを望んでおられます。

今ここに、

「私は親切で愛情いっぱいの人間です。きっと友だちもみんなそう思っているはずですよ」と思っている人もいますでしょう。

でも、友だちだけではだめです。

イエスはこうおっしゃいました。

マタイ5:44 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。

5:45 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。

5:46 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。

5:47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。

皆さんもご存じのように、当時の取税人は、ユダヤ人から軽蔑されていました。というのも、取税人はローマ帝国に雇われていて、徴収した税で生計を立てていたからです。

ここで言っているのは明らかです。愛してくれる人だけを愛し、挨拶してくれる人に挨拶を返すだけなら、どんな報いがあるでしょう。

イエスは言われました。社会でもっとも軽蔑される人たちでも、それぐらいのことはします。

私たちがそうしているなら、世間で一番悪いとされる人たちと同じだ、と。

たいへんです。主よ、助けてください。

もちろん、私たちの愛情を断固拒絶する人もなかにはいます。

友だちにもなりたくない、話をしてくれない、私たちの顔も見たくないという人たちです。

親切にしようとしても、とにかく私たちと関わり合いたくないとあからさまな態度で示します。

そんなとき、こう思います。

「私、何かしたっけ？あの人、なんなんだろう？」

こんな人がいたら、私たちはどうすればよいでしょう。

もちろん、嫌われたらこっちも嫌うというのが簡単なことです。

されたようにする。

「因果応報」

「あの人が自分で蒔いた種を刈り取っているだけだ」

これは、クリスチャンとしてあるべき態度でしょうか。

いいえ、これはこの世のやりかたです。

聖書はこのように語ります。

ローマ12:17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。

私たちが差し出した友情の手を拒まれても、

それはその人たちの問題です。

私たちが二度と手を差し伸べないということではありません。

その人たちに対して辛らつにならず、主に倣って愛と親切を示しつつきましょう。

そうすれば、主の御前に立つとき、主の命令に忠実であったので、良心のとがめることはありません。

むずかしいですね。とてもむずかしいです。

でも、不可能でしょうか。そんなことはありません。

ルカ1:37 「神にとって不可能なことは一つもありません。」

=====
この話をしているうちに、愛についてよくある誤解について触れたいと思います。

皆さん、神が私たちが愛してくださっていることは知っていますね。

そして、神は私たちが愛してくださっているからこそ、私たちが何か間違ったことをしていたら、教えてくださることもわかりますね。

それは、罪の責めと呼ばれています。

イエスご自身もこうおっしゃいました。

黙示録3:19 わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

では、他の人から過ちを指摘されるのが嫌なのはなぜでしょう。

誰かが愛をもって過ちを指摘してくれても、けん制したり、むきになって自己弁護したりするのはなぜでしょう。

すごく気を悪くして

「なぜ私のことを裁くんですか」などと言います。

そしてイエスのことばを引用して、

イエスさまはこう言ったでしょう、と言います。

マタイ7:2 あなたがたが**さばく**とおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが**量る**とおりに、あなたがたも量られるからです。

「だから、私のことを裁かないでください」

第一に、裁き主はただひとり、神のみです。

次に、いつの日か、私たちは皆、神による裁きを受けます。

ですから、私たちは誰も人を罪に定めるという意味で裁くことはできません。

それは、神の領域です。

しかし、だからと言って、罪を犯している人に愛をもって注意をしてはいけないという意味ではありません。罪を犯しつづければ、その人は最終的に罪に定められてしまいます。

聖書には警告がたくさん書かれています。

イエスご自身も、天国についてよりも地獄についてたくさん語られました。

新約の手紙には警告がいくつも書かれています。

例えば、パウロはこう言っています。

1コリント4:14 私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、**さとす**ためです。

私たちが何かしていることについて、誰かが注意をしてくれたなら、感謝しましょう。

パウロがテモテにするようにと言ったとおりに、その人がしなかったのを感謝しましょう。

1テモテ5:20 罪を犯している者を**すべての人**の前で**責め**なさい。ほかの人をも恐れさせるためです。

先ほども言ったように、あなたがクリスチャンとしてふさわしくないことをしているのを見て、誰かが愛をもって注意してくれるなら、

そのことを感謝しましょう。

その人が、人間関係以上にあなた自身のことを大切に思っている証拠です。

それこそ本当の愛です。

箴言27:5 **あからさまに責める**のは、ひそかに愛するのにまさる。

27:6 憎む者が口づけしてもてなすよりは、愛する者が傷つけるほうが真実である。

愛する者が傷つけるほうが真実、とあります。

それが本当の友情です。真の友は愛をもって真実を語ります。

それは、パウロのしていたことです。

使徒20:31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを**訓戒**し続けて来たことを、思い出してください。

というのが愛のない行動でしょう。

誰かが過ちを犯しているのを見ても

それを正してあげるほど、その人のことを思っていない。

こう思いますか。

違います、そんなことはありません。人のことをちゃんと思っています。

だから言わないんです。

相手の気分を害したくないから。

それは違います。

誰かのことを大切に思うなら、イエスやパウロのように、ちゃんと注意してあげるはずで、本当のところは、相手のことより自分のことが大切だから何も言わないのです。

どういう意味かという、
こんなこと言ったらどう思われるだろう、
どんな反応されるだろう、
言っても聞いてもらえないかもしれない、
そういう恐れから、言いたくないと思うのです。

それは、相手のためでしょうか。
いいえ、自分自身のためにそうするのです。
先ほども言ったように、愛をもって注意するのを怠ると、
相手を受けないことになり、
自分自身を受けないのです。

厳しいですね。
過ちを指摘すると、人は機嫌を悪くしたり、
私達を嫌がったりします。
私も、相手を大切に思って注意をしたら、その内容を無視されただけではなく、嫌われたという経験があります。
それはもちろん傷つきます。

けれども、傷ついたとしても、その人たちが拒んでいるのは私達ではないことを知っててください。
神のみことばにある明確な教えを拒んでいるのです。

パウロはこう言いました。

使徒20:26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。

20:27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

嫌われて傷ついても、私達は相手のことを思い、愛をもって話したわけですから、良心の呵責はありません。

では、誰かが私達のところに来て、私達がやってもいけないことについて愛をもって注意してきたらどうでしょう。

つまり、濡れ衣だったとしたら。
まず、その人に怒りを向けてはいけません。
その人が私達のことを思っていないければ、わざわざ言ってこないでしょうから。

では、言ってこられた内容が真実でなかったとしたら、
間違った印象を与えるようなことを自分はしていたのだろうか、自問する必要があります。
心当たりがありますか。

言われたことが真実なら、告白して悔い改めましょう。

もし真実でなくて、心当たりがなかったとしても、

「そんなことをしていると思われるようなことを何かしているだろうか」と省みる必要があります。というのも、人の目には、そう映っているからです。

ではどうすればよいでしょう。

「梨下に冠を正さず」です。
怪しげな行動をしなければ、怪しまれることはありません。

そして、注意してくれた人には感謝しましょう。

他にも疑っていた人がいたかもしれませんが、その人だけが私たちのことを思って直接話してくれたのですから。

その人は、良い友人です。

私はそういう人を尊敬します。言っている内容に賛同するかどうかはさておき、その人の正直さを尊敬します。

そして、ノンクリスチャンの家族や友達に正直に愛をもって真理を語ることも同じです。その人たちを大切に思うからこそ、ちゃんと話すのです。

カリフォルニアの牧師から聞いた証です。

彼はクリスチャン家庭で育ちましたが、高校の時の親友は二人ともクリスチャンではありませんでした。そして、彼がクリスチャンであることも知りませんでした。

ある日、日曜学校の先生がマタイ25章の裁きの日について教えてくれました。民が羊とやぎのふたつに分けられます。羊は天国に、やぎは地獄に行きます。救われるか救われないかのどちらかしかありません。

その夜、彼は家に帰って寝ました。

そして気がつくと、彼は羊たちと白い衣を着て列に並んでいました。周りの人たちと飛び跳ねて喜んでいきます。すると、やぎの列に並んだ二人が彼を恨めしそうに睨んでいるのに気付きました。ふたりの親友です。

友だちふたりはこう言いました。「どうして言ってくれなかったんだ。わかっていたのに。前もって注意してくれることもできたはずだろう。」

「だって、そんな話をしたら、もう友だちでいてくれないと思ったから...」と面目なさそうに答える彼。二人の友だちは言いました。「知っていたのに言ってくれなかったなんて。」

「それが友だちかよ！かよ、かよ、かよ、かよ.....」

そして彼は目覚めました。夢だったのです。けれども、自分は彼らにとって本当の友だちだろうかと考え始めました。

次の日、学校に行ってあの親友ふたりと会いました。そして、自分がクリスチャンであること、そして、神が彼らのことを深く愛してくださっていることを話しました。

ひとはそんな話を嫌がって、去って行きました。

もうひとは、「もっと詳しく教えて」と言いました。そして後にクリスチャンになりました。

ひとりめの友だちがどうなったかはわかりません。

けれども確かなのは、裁きの日が来ても、「どうして言ってくれなかったんだ」とか「それが友だちか」とは言われないことです。

むしろ、「君は良い友だちだった。君の言うことを聞いていればよかった」と言うでしょう。

私たちはどうでしょう。本当の友だちになっているでしょうか。

=====

では、パウロの友だちの話に戻しましょう。

コロサイ4:10 私といっしょに囚人となっているアリスタルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです—この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。—

4:11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。

パウロ自身、人に拒絶された経験がありました。彼の働きが続くにつれ、異邦人への働きが中心となり、多くのユダヤ人たちがパウロのことも、彼の言うことも拒むようになっていたのです。

この時点で、パウロにはユダヤ人（割礼を受けた人）ではたった3人の**同労者**しか残されていませんでした。

しかし、この3人が大きく貢献しました。パウロを**激励する者**となってくれたのです。

すばらしいですね。私にも、激励してくれた人がたくさんいます。

ともに奉仕し、祈ってくれた人たちです。

その人たちは、つらい時に励まし慰めてくれた人たちです。

10節に登場するマルコは、バルナバのいとこです。

コロサイ4:10 私といっしょに囚人となっているアリスタルコが、あなたがたによろしくと言っています。**バルナバのいとこであるマルコも同じ**です—この人については、もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。—

このマルコは、第一宣教旅行でパウロとバルナバから離れた人です。

使徒15章で、ふたりが反目し、別行動を取るようになった原因を作った張本人です。

使徒15:37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。

15:38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。

15:39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。

15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

ここから学ぶべきことがあります。

ふたりの神のしもべ、

しかも長年の友が
どうにも意見を一致させられないという状況です。

マルコは若く、すでに一度彼らのもとを離れていました。
そこでパウロは、「彼は未熟だ」と言いました。

しかしバルナバは、これは私の甥で、訓練が必要なのだ、と言います。

どちらが正しいのでしょうか。どちらが間違っているのでしょうか。
ふたりとも正しいのです。

マルコはまだ未熟だというパウロの意見は正しいです。
しかし、バルナバが労力を注いで彼を訓練しなかったら、成長しなかったでしょう。

ここでわかることは、バルナバが手をかけてマルコを育てたおかげで、パウロは祝福を受けているということ
ことです。

また、私達も祝福を受けています。というのも、このマルコはマルコの福音書の著者だからです。

もちろんマルコは失敗しました。
第一宣教旅行でパウロとバルナバを離れてしまいました。

では、マルコがそこであきらめていたらどうなっていたでしょう。
やる気を失って、そこでやめていたら。
神が備えてくださった素晴らしい祝福を取り逃していたことでしょう。

皆さん、挫折体験はありますか。
きっと誰でもあるでしょう。
もしまだなくても、
いつかはそういう経験をするでしょう。

でも、あきらめないでください。
失敗から学んで、前進しつづけてください。

パウロはこう言っています。

ピリピ3:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、
3:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

パウロは教会を迫害した人です。マルコは自分の叔父を離れました。ペテロは三度もイエスを知らないと言いました。

けれども、彼らはあきらめませんでした。

私たちも失敗することがあります。それも、一度ではないでしょう。

しかし、立ち上がってください。前進してください。振り向かず、目標を目指してください。

落胆している場合ではありません。

イエスがあなたを愛してくださっている、あなたを赦したいと願ってくださっている、そして、あなたのことを見捨ててはおられない、という事実に感銘を受けましょう。

エペソ2:10 私たちは神の**作品**であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。

コロサイ4:12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。

エパfrasのような人がもっと必要です。

祈りに励む人です。

祈りを通してどれだけのことが成されるか、私たちは見落としています。

多くの場合、主に仕えることが重要視されがちです。

もちろん奉仕は大切です。

しかし、まず祈って土台を固めなければ、神への奉仕で役立つことは何もできません。

彼の祈りはすばらしいものです。彼らが

「神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう」にと祈っています。

もし祈り方がわからなかったら、こう祈ってください。

ジョセフが神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるように、と。

すばらしい祈りです。

コロサイ4:13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。

4:14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。

ご存じの通り、ルカは、ルカの福音書と使徒の働きの著者です。

ルカはパウロの仲間でした。

また、新約聖書の書簡の著者では唯一の異邦人（ユダヤ人でない人）です。

私たちの知る限り、デマスはあまり良くない方に行ってしまいました。

パウロは後に、彼について残念な報告をしています。

2テモテ4:10 **デマス**は今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまい、また、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに行ったからです。

デマスが以前忠実であったからこそ、パウロは余計に悲しんだことでしょう。

私たちもそのような悲しみを経験したことがあります。

兄弟姉妹が信仰から離れてしまったと聞いたときの悲しみは、とても大きいです。

しかし、このような心の痛みがあったからこそ、パウロは信徒たちにますます警告しました。

コロサイ4:15 どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。

当時の初代教会は、家庭集会から始まりました。今でも同じです。

コロサイ4:16 この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。

4:17 アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。

パウロは、アルキポに務めを果たすようにと勧めています。

また、同じことをテモテにも言っています。

2テモテ4:5 しかし、あなたは、どのような場合にも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。

務めを果たすとはどういうことでしょうか。

パウロはどのように自分の務めを果たしたでしょう。

彼は続けてこう言います。

2テモテ4:6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。

パウロは、テモテのような人にすべてを注ぎだしていました。

また同じ手紙でこうも言っています。

2テモテ2:2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

神からパウロへ、パウロからテモテへ、テモテから他の人へ、他の人から私たちへ...

パウロはどのように自分の務めを果たしたでしょう。

他の人に自分の持てるすべてを注ぎだすことによってです。

自分がいなくなった後も、働きを続けていける後継者を育てることです。

あなたは奉仕をしていますか。

もしそうなら、このことばはあなたに向けられています。自分の務めを果たしなさい。

どういう意味でしょう。

それは、手をかけて他の人を育てることです。

自分のしていることを、自分がいなくなった後も続けていける後継者の育成です。

自分の奉仕をわが子のように扱う人がいます。愛しいわが子よ、と。

他の人にその奉仕を触らせません。

手伝いもさせません。

「けっこうデリケートなので、他の人に任せるのは難しいです」などと言います。

「これは私の奉仕。私のもの。神は私にこれをしてほしいと思っておられるのです」

そういう人には、私はこう言います。

あなたには、まだ何もできない赤ちゃんがいたとします。

その子を放ってどこかに行きますか。

もちろんそんなことはしません。

赤ちゃんの扱いがわからない人にその子を預けてどこかに行きますか。

あり得ません。

では、あなたに万一のことがあったら、その赤ちゃんはどうなりますか。

あなたには明日が約束されていると思うのですか。

明日を約束された人などいません。

お分かりでしょうか。もし赤ちゃんのことを本当に大切に思うなら、

自分に万一のことがあった場合に備えて、赤ちゃんの面倒を見れる人を探しておかなければいけません。

奉仕も同じです。

パウロは、自分がいなくなった後も他の人が働きを続けられるようにすることで、自分の務めを果たしました。

私たちの奉仕はどうでしょう。

その奉仕を本当に大切に思って、自分が突然いなくなってもその奉仕が立ち行かなくならないようにしていますか。

コロサイ4:18 パウロが自筆であいさつを送ります。私が牢につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように。

アーメン。

祈りましょう。